

令和 3 年度
研究調査報告

【概要版】



四日市市教育委員会教育支援課

第413集 東出 剛佳

生徒会活動が活性化するクラウド活用に関する研究

— Google Workspace for Education を通して —

第414集 堀 綾香 上原 啓江 前田 怜子 野中 純子

校内ふれあい教室での支援に関する研究

— ソーシャルスキル・トレーニングの実践 —



1 研究の目的

中学校の生徒会活動において、クラウドを導入することが活動の活性化につながるかを検討する。

2 研究の内容と方法

(1) 介入群と統制群

生徒会活動において、クラウドとして Google Workspace for Education を導入する学校を介入群、導入しない学校を統制群とし、比較検証を行った。

(2) 介入群と統制群への事前指導

介入群には、Google Workspace for Education の各ソフトウェアの概要と操作方法のみを指導した。教師から与えられた受動的な活動となってしまうことを避けるため、具体的な活用方法は指導せず生徒たちの自主性に委ねた。そうすることで、クラウド活用が生徒たちにとって、より汎用性の高いものになることを期待した。また、Google Classroom で各学級・専門委員会などの「クラス」を作成し、全生徒をそれぞれが所属する学級や専門委員会のクラスのメンバーとして登録した。クラスの中では、「ストリーム」を利用し、教師と生徒及び生徒同士でのコミュニケーションやファイルデータのやりとりをクラウド上で円滑にできるようにした。

統制群は、クラウドを活用せず、従来通りの生徒会活動を行うこととした。

(3) 効果の測定

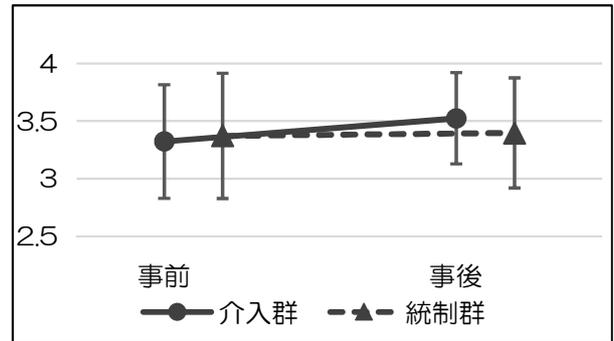
本研究では、「活性化」を「生徒の学校への帰属意識や他者との関係性といった学校適応感が向上すること」と定義した。「学校生活享受感測定尺度」と「学校への心理的適応」を測る調査を用いて、介入群と統制群の介入前後の結果を比較分析した。

また、介入後のみ「生徒会活動についての振り返り調査」を行い、同様に比較分析した。

3 研究のまとめ

(1) 学校生活享受感測定尺度と学校への心理的適応

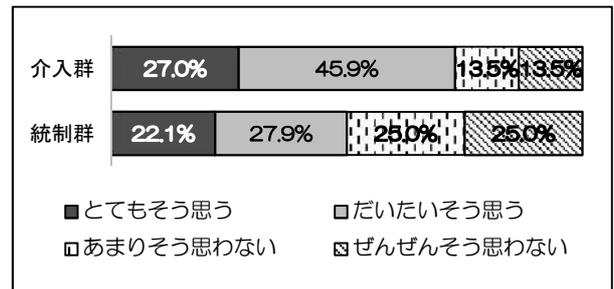
介入群は、介入後に学校生活享受感測定尺度の評定平均値が上昇し、統制群を上回った。【図 1】学校への心理的適応においても同様に、介入群が統制群を上回る結果となった。



【図 1】学校生活享受感測定尺度の評定平均値と標準偏差

(2) 自己肯定感と自己有用感の高まり

生徒会活動についての振り返り調査の「生徒会活動（専門委員会活動）で、自分の意見が採用されたことがある」の項目で、肯定的回答が統制群の 50.0%に対して介入群が 72.9%と、20 ポイント以上の大きな差が生まれた。【図 2】



【図 2】「生徒会活動（専門委員会活動）で、自分の意見が採用されたことがある」の割合分布

また、「生徒会活動について思っていることや感じていること」についての自由記述でも、「生徒会活動（専門委員会）では、自分の意見がちゃんとと言える環境になっていて、とてもいいと思いました」「前よりもより意見が出やすい専門委員会になっていったと思います」という回答があった。

これらのことから、自分の意見が採用されたり活発な意見の交流ができたりすることで、自己肯定感や自己有用感が高まったと推察される。

他の項目においても、介入群は統制群に比べ肯定的回答の割合が高くなっている。以上のことから、介入群において学校適応感が向上したと考える。つまり、クラウドを導入したことで、生徒会活動は活性化したといえる。

1 研究の目的

四日市市では、令和2年度より、不登校生徒数が多い中学校に「校内ふれあい教室」を設置した。登校はできるが教室に入りづらい生徒を対象に、専用の教室と専任の教員を配置することできめ細かな支援ができる体制を整えた。令和3年度には6校の中学校に設置している。

校内ふれあい教室を利用する生徒に対する支援に SST（ソーシャルスキル・トレーニング）を取り入れることで対人関係に必要なスキルが高まるかを検証する。

2 研究の内容と方法

(1) 研究対象

校内ふれあい教室設置校のうち、令和2年度設置校の3校で、校内ふれあい教室を利用する生徒とその支援を行う不登校対応教員を対象とした。

(2) 研究の内容

研究対象校で、校内ふれあい教室を利用している生徒に、1～2週間に1回の間隔で計3回の SST を実践した。実践の前後に、校内ふれあい教室を利用する生徒と不登校対応教員に対し SST に関わる調査を行い、実践前後の比較により、対人関係に必要なスキルが高まるかについて検証した。

(3) 検証の方法

本研究では、「対人関係に必要なスキル」を「集団活動スキル」と「社会的スキル」と定義し、その2つを測る調査を行った。調査は、生徒と不登校対応教員を対象に、それぞれ自己評価と他者評価を、事前、事後、遅延の計3回行った。また、生徒の SST 後のふりかえりと不登校対応教員を対象とした記述回答式のアンケートを行い、これらの結果を分析した。

(4) 結果

集団活動スキルは、生徒の自己評価、不登校対応教員の他者評価ともに得点の変化が見られなかった。また、生徒の自己評価と不登校対応教員の他者評価は概ね一致した。社会的スキルは、生徒の自己評価には大きな変化は見られなかったが、不登校対応教員の他者評価は事後で上昇し、その得点が遅延でも維持された。

3 研究のまとめ

(1) 生徒の学び

生徒による自己評価では、集団活動スキル、社会的スキルともに3回の調査の得点に大きな変化は見られなかった。しかし、SST 後の生徒のふりかえりには、「相手に伝わりやすい声の大きさと話したり、ジェスチャーで伝えたりしても伝わりやすいことがわかりました」「顔を見て言った方が言われる側もよるこんでくれてよかったなという気持ちになれるということが知れました」という記述があり、生徒が SST を通して、人とコミュニケーションをとるためにはさまざまな方法があると学んだことが読み取れた。また、「相手の立場になってわかりやすく伝えられるといいなと思いました」「断り方によって、相手との関係を悪くしてしまう可能性があるから、気をつけようと思いました。理由もきちんと伝えて、理解してもらえるような伝え方をしたいです」という記述もあり、相手のことを考えた行動をとることの大切さの理解につながったと考えられる。

(2) 社会的スキルの高まり

社会的スキルについて、生徒の得点に大きな変化は見られなかったものの、不登校対応教員による他者評価では、7人中6人の得点が事後で上昇し、その得点は遅延でも維持された。不登校対応教員対象の記述アンケートでも、「筆記用具を忘れてきたとき、理由と貸してほしいことをきちんと伝えることができた。以前忘れてきたときより、自信をもってはっきりした声で話すことができた」と回答があり、生徒の行動に変化があったことが示された。SST を実施することで、対人関係に必要なスキルのうち、社会的スキルは高まったといえる。



令和3年度研究調査報告【概要版】

発行 令和4年3月

発行者 四日市市教育委員会教育支援課

〒510-0085 三重県四日市市諏訪町2番2号

電話番号 / 059-354-8149 FAX / 059-359-0280

E-mail / kyouikushien@city.yokkaichi.mie.jp

